

披沙揀金

十七

竺

共廿四

庫	文	閣	内
一五九函	三三二六九號	三四冊	和書類



内閣文庫	
番號和	33169
冊數	34 (17)
函號	159 60

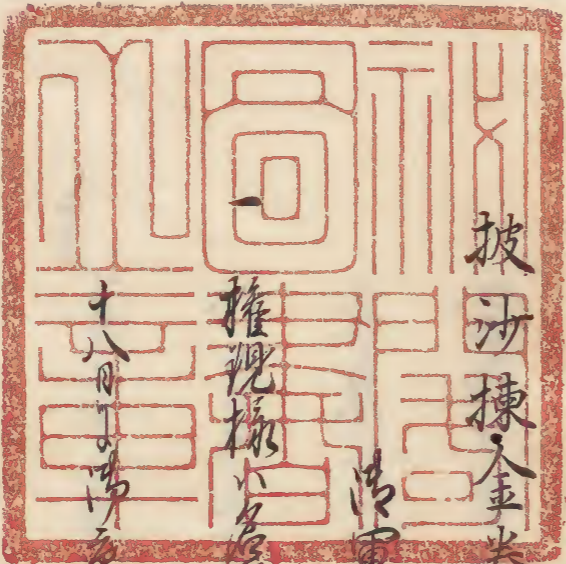


糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

同234

披沙揀金卷第十七

治軍略の心事



権規極小名後屋へ新成内親より庄作より大坂治陣とて四月

十八日、治軍略の心事
諸士
軍談

一 大坂治陣の時

家康公い京都へ早く上り給ふ

家忠將軍い遅く立給ふよりして治軍略を

家康公思召よりして治軍略を遅かりは是の治軍略より立腹あり

〜て宣〜老臣の我知先へ上せ若き

將軍思ひの如に遅〜若〜治〜事是難〜事の如く宣ひて立腹深〜

さ〜り〜は〜湯傍の〜掃の齒と門の〜常形と泡脚をよ〜

秀忠將軍は時を甚きなり〜い急げと信ありて二別名田より継

るは治湯手廻り漸〜二十騎斗めし是〜り〜

今日爰元へ湯蒸れのみ〜

家康公へ中上と云ひ

家康公迄御愛〜して湯立腹あり

將軍と云り我子と生是来て左極めもろ矢の道不業因

め〜い〜年々天下の事〜成治〜

將軍達系〜我立腹は〜

家康公奉は菴治ひて宣ふ事〜大坂の者〜

京都への取掛事〜思ひ〜

〜軍難成意よ〜

將軍の分別めい〜

〜来るは〜の分別め〜

湯勢面ハ二湯所ニシテナリ

後河
大坂

一 大坂湯陣日月事ノ湯城ノ

將軍極湯入ニ成

権現極湯相談あり大坂表湯多分湯定あり軒直長十日

案ノ事トモ

湯前ハ湯出テ湯先ノ事 御符下ルハ湯を

権現極湯機姫能なる取合事トモ大坂表ハ

將軍先子湯城ノハ湯系をれ——大坂外和泉河内ノ地也トモ

皆秀頼ハ一味——寄手後より此の取掛なる是ハ後陣意元ハ尾張

ト其方ト永井右近安面組ハ後陣ヲ担ハシメリノ勢也一切事トモ

湯意ナリ

紀別頼直御
言行録

一 元和元年日月事一日

將軍極湯見ハ湯若陣ヲ控垂ニ二條ハ湯城ヲ湯對敵ヲ控出和

大坂取極上ニシメい来る廿八日大坂表ハ湯出馬ノ事控トノ作也付

トモウクモ思ハ湯事ノ事トシテ上其後和泉守トハ加賀

我分出將奥州ノ軍勢共系陣ノ間ハ七日も湯出する内門

此種之報告は作上の要也

大津市様は作上の事察し、今度、彼に城を必要害
の儀なり、其の防犯を止め、城を出入りせず
ても一戦よりの及評儀、鏡にうけゆるまゝ、
勢が結合するまゝ、無く、紙敷勢といふ程有るも、
野分
の合戦、こゝをいへば、追崩し、とて、明間と、こゝに
八日、出るといふ、作上の事

將軍様への伏見へ、津海を、此の翌朝、早天と、二條へ、津に出、此種

昨日も、作上の事、こゝに、廿八日、津出るといふ、作上の事、此種

む、津出るといふ、作上の事、こゝに

大津市様は、意、こゝに、意、亦、こゝに、云、聞、する、まゝ、こゝに、野合
の合戦、勢の多、少、こゝに、不、考、今、度、は、我、亦、老、年、こゝに、及、び、お、苗、の、合
戦、あり、こゝに、前、先、を、こゝに、後、方、を、後、こゝに、此、を、津、出、と、い、ふ、こゝに、上、意、
付

將軍様は、此、上、の、事、の、思、は、こゝに、津、出、と、い、ふ、こゝに、此、種、の、儀、の、諸、事
の、記録、等、の、も、書、記、一、末、代、ま、り、こゝに、お、鏡、の、中、に、後、の、記

湯前様より湯先を託其湯約より私系りゆと有るゆへに
天下の人等掛り申候速懸仕向世候と云ひけるに裁度も湯
引申上旨を託候へとも湯開入不託候とて申候候御事
湯向ひを託

將軍もあの通りと申中候も今度の一戦の候は梅も我
の弟と申り候も候と云ふより友先へ云々と云ふ上意
付佐渡守

湯前へ進み出立候と湯親子振水を論の事と申意

託候より候明不申候湯應召湯先後の候は古法湯事
湯先と申中候

大湯前様佐渡守古法と申中候申候と申意の付佐渡
守私幹の承り候へは古来より先々の候は少成共敵地へ進
出方よりお初め申候と申意

將軍梅より伏見の湯候と湯應召候候と有るゆへに湯先
と申意と有る湯先の湯事候

大湯前様の御理めり候と申中上候

大津西極の佐渡守といふと此の事なる旨法記なりと有上
意めり津島に在り其後なり

將軍と先へは未働むとゆと有作より事跡以後佐渡守

深井日く津出馬と在りやと如何に遠國の軍勢不系なり

五月朔日より津定と在り此後いふ方入より一二月越小島

津方と在り不用と法一軍勢とも腰に鞭計めり在り此後

めりて中解者と在り出のとなり其後本多と野分在り津陣

交番の儀に在り此万事六月分と在り其後津膳米

五木の積りといふより此の交番に在り春雨方の役人とも中後

此後と上意と在りといふこと右に在り此後記も在り有く此

とも有記と在り此の事書留に在り森多見宗幽津野固幡

書後への在り此の事なり
落穂集

一 大坂津陣の時四月末方二夜津城と在り

津西極津出馬の事津佐押の儀

右徳院極へ

権現極に在り津守といふ河内は津先

右加賀元
左戦前元

津先は星田中より

押出其次關東元井伊掃部頭及當和泉守清後倭本多後
守正作丹波大和守清先主政宗二番倭本多義隆守と水野日
向守と松平下總守及濃元同勢義隆後元正作丹波と清錠の妻
権規極正岡石女使不三徳大軍の先主敗軍の時不可為惣負の
未清普代の者の因く先主仕附の者家中めと有く普代
の者正先主と正信守一番合戦正初二番倭く加賀義隆前正信守
正作出大和に政宗先主と二の守と正作丹波本多義隆守水野日
向守大和元松平下總守義隆元正信守の妻清先主と為上意清普

代元清先主正信守の後代も遠國へ清旗本より上使正を公
國持大老と先へ押出の儀不可為向清へくも清旗本より先主
數一万も一万六千も正を流上使正を公へく清旗本より先主
仕の極く仕度事のように松平古戦中守常く中の
前橋高
元岡書

一 大坂復讐陣小

権規極の系統より大坂へ清出正の
右徳院極の伏見より大坂へ清出正の義隆先主清着正の
権規極を清むるひり清出正の

一 大坂復軍二條陣出るの時松下清慶は清勝兼六外陸
て徳網一校枝二袋味噌一指鎧衣等の物をお懸為持て糸其
外不用と云はれ清勝の用の中は長持一ツめく仕也備ふ
惣に清事なり 武造 雅徳

一 大坂復陣

家康公は松下清慶は百今度大坂表陣場めくの支度のため
清勝兼六外干鯛を一枚指の外味噌鎧なり一音の物右の
通お懸りめくせと糸清持糸不仕有る作清勝兼六所賄

唯長持一ツめく仕也中練り清幼少より清お別々甘茶
と皆威しめく中川をんとなり 武造 雅徳 聞書

一 五月六日早朝より小雨降中

大坂表陣清陣は早田より今日い交り清進軍三袋成のよう
仕出さるゆゑ

將軍様より言ふ本九番久貝忠之席清使と糸を中
より款出張仕より中上清使糸と別儀清進成
二里程清出ゆゑより井俣掃部めく一番首取中川中少

此とも名のより〜さうさ首好領仕吊ひ中脩より中上寄
右邊大吏より新下利里田めくさう〜納め並陣お海邊小
華乳佛事とい程は仕生捕五人の中二人は右邊より送け
二人は上野より送け其内一人は陣の傍と右邊より送け
めく右邊より送け其内皆送け六日の日暮時分年固へ
送着右の松平右衛門より送け仕生捕〜送方の事
送尋治の後は松平右衛門大吏より送け永井平太吏と
右衛門めくさう百石送け
慶長見
聞書

一 六月六日の晩本陣上野分

大陣前様の湯前へ夜出明晩の湯基前支度場の場い何方と
中付へ〜湯と夜お煙火の葉白山と上意有〜い存い〜
湯味方〜夜費〜あると中場前めく〜無〜い處〜合点不系
後〜い存さう〜其音中湯前前果〜〜翌七日の夜葉
白山前湯本陣と送け湯明夜なる湯事ともい〜
上野分物語送けい〜
落穂
集

一 大坂陣めく

権現極の湯旗卒の湯人教と

將軍極の湯人教と平野めく先操合先後と辛ふ其時極

甚在湯の系てゆり〜留中達せり

家康公宣い〜世方の人教

將軍親巡り〜同世終ふ極田めめく湯意のめ〜なりと

昔ふ其時

家康公宣い〜我り人教ハ平野を存〜見〜し〜押

將軍の人教ハ平野親存〜見〜し〜押〜湯下報あり〜ふ

よろ〜湯人教と〜い〜め〜め〜用ひ給ふ事極又

湯人教陰陽の合る事急將の早記湯工支なりと語り

湯人 翁抄

一 大坂めく六月七日の朝合戦以前先多〜松平石見守松平大

隅守水野使前守 二組丈
昔改 一而〜り〜あり有

神君より松平傳三郎親湯使めく一組り間と二十万わと

宛も通傳ハ極〜い〜り〜り〜大極物改系出せハ記礼と

このなり別〜は〜く〜た〜り〜居〜は〜礼〜と〜り〜

多記述より小軍向備所より湯見分の上を控湯下知の首其時
て突掛と於湯上と湯仕形あり湯教訓控す是は湯為張堅
陣の度敷豊前湯先より代子本多出雲守小笠原吉房が
討死此後無何と湯攻令因事湯旗本崩れたり後小^{ナリ}ぬ記
林有りに大將維礼入不連お徳なり

村越道
伴差書

一 柴白山於を前

家康様湯下知^{ナリ}の境に京に支所の味方の人數の倍程の
立並為成りしに^{ナリ}湯攻の儀に依りて^{ナリ}湯攻の儀に依りて^{ナリ}湯攻の儀に依りて^{ナリ}

湯攻なり本多と野分を為石柴磨山へ湯先にお徳一見
結のより一に仰出のめ付後者二人お志し久と野分を結
柴磨山本多の家を焼失室中め付

家康様大坂の方へは湯攻を柴磨山へ湯押入を命じ打ふ
一と野分崖の陰に沙一並に多勢敵と見張れ湯旗
本へ鉄炮二三筒打掛ゆに付湯旗本小十人組柳下若田
中布席在る石巻勝三勝此二人鉄炮打ち多し者とも二人捕
り湯前へ石連系りて殺殺害のより一遂に上りぬる不

若し官に放遣のより一に後出に終る事終る其亦正宗後
めく事連系支三軍同士討死とも是も終る事沙汰終る
右鉄炮打掛り時分事倭大死く一前事亦尚を被部村越道
伴是書
一月七日兼無山事陣系執る事掛事腰大坂の方事終
の事あり

秀忠極尾浪及紀伴及も事系上は、井伴掃部政茂堂和
泉守系上今日事合戦事勝利の儀事存候也
家康極事極不斜掃部政茂は父事政茂少事延初少

事を事、事正を教度の高名ふて揚事維然多勢門迫る
下知の儀に難事共方の若事多りとも一も麻大軍去事
の仕事取今の働始終の勝負事今度の事柄に事此教の
能親りも生後のより一に事感なり一次に和泉守り、事終り
前より一に事約儀の節に事透此事と大軍に討勝教度の
戦功に事類のより一に事感なり一に松平下総守系上軍方の
事復事事極の者今取に事此は具是事義事向備陣屋
堅固に事此夜のより一に事意なり一に事系上の面を戦功の

事とも常感悦ぶ程の度嘗て時々々々本多佐渡守来
陣より明日城攻の事候合ふ程のより一に待出の事あり
佐渡守某陣を境に待使番を以て陣前より坂有
くはり言ふありては我者も待出を以て向陣及び上意
する上ありて是上のより一ありて是上のを遣りて是上の
ありて是上の踏踏其時城攻の事お候に待出の事ありて是具
足候事候との事ある本多上野にお尋ね候いりある者
り早に待出へて待出へて上意ありて友人待出上野にお近

所桐市正同之様心中上りの大坂城落去仕の市正事業も也
不勝め付宗樂の御ありて出張千尋ありて火矢射付を候
矢の万尋程糸母公本丸退死玉造の荒布布落へり籠
り別ありて誰令勅書は小智ありては留りて是加待物より一云上
仕り其時極い明日の城攻不及候様井俣掃討政安反對あり
所初傳申すに及石見守早進お候玉造の去程候ては警固の
より一に待出の事候候事

村藏通
伴荒書

一 大坂落城の朝

中々中上は好い故に如書大野修理方へ是れと書好む
東海前めりし書書せ其方者へ修理も見知りしと書
はへし書意を来しへは長中則持系のとて此若河原へ行りて
系へしと書意を来しへは長中則持系のとて此若河原へ行りて
云せ百袋及びりし叔七日の朝合戦前秀頼も書書振の門
中へし書出へし書修理も不押立城布へ書出りしこの
状持系一覽仕其まへ真田在馬へ持系見せりて是茂森
豊家貞として中々中上は好い故に如書大野修理方へ是れと書好む

のよう、左馬場中其時修理城中へ入振つ因りて秀頼之閑
後後秀頼城中へ書入り修理も不城中へ持入り故修理人故
城中へ入りしと見りて敗軍のよう、大坂めりての櫃子、山川常
力重徳より状の文体は七絶の元ふ書書切りしと書約米
中々中上は好い故に如書大野修理方へ是れと書好む

なり
池田正印
是書

一 七日森豊が平野川平佐吉の松の隙へ白旗二ツ圍子の
る中見ゆる中振

家康公の將軍ありて是れ一文字と掛て新果のより西へ
中時之龍白旗見へしつる長井傳之橋水野保尾つ支人
中付位名の板子見へし系子下中をせし龍見へし中
其時ふいと哀れし旗は赤巻七葉白出

將軍旗赤巻七葉白出 比田正印
光吉

一 七日の朝

神若く赤巻七葉進み辨めし何の具足入へし
終つてつる玉造口の知事及前の長官し、赤巻の因り赤

光ありて赤巻一戦は負へし其時、横池入とんと思ふ
久しし合戦をくはしむしひの無業因者ありし赤巻
ありし事し仰りしとあり 永日
記

一 大坂赤陣七日の朝

権現様しし赤巻は石丸高石丸をくつてその赤巻赤巻
の赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻
赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻
赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻
赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻は赤巻

いるものありしゆの上意有るる氣沛前立は後相平
 右邊の支沛前立は長けり、正作味ゆい和氣と事い上意者
 由へ下へ見せぬ振、とむのひて今の振に挨拶をせり
 一、ふりより寒い年あり、殊の外下後あり、もふくは
 故具足なりと云ふ、い言の宗下りもなり、ぬゆへ具足と
 ち着るものなり、若し時と大に遠ひ、ふり事、なりとの
 上意、くゆくなり、後河 七巻

一、大坂陣の時天皇寺により、城へ入殺入、中へお入、事と
 何も中上の時上意其あり、ぬゆへとの儀なり、子細に
 能武士と云い、よく外なり、今城中に入者い、定め、造る
 らざる、難人、共あり、言ふ、左振、なる者い、多居、は、城
 中、こんらん、あるものなり、軍の勝、は、方、く、取、り、上、い、は、福、城、へ
 入、り、く、も、不、善、と、沛、意、なる、是、其、事、く、正、長、の、題、の、寛元 開書

一、大坂陣の時城焼立、あり、沛、合、戦、過、井、仔、掃、後、
 権、親、様、の、沛、意、へ、正、長、の、へ、甲、冴、ぬ、記、の、き、く、と、ぬ、く、沛、意、へ、正、長、
 へ、沛、意、札、より、沛、意、あり、沛、意、と、出、す、是、大、形、札、と、沛、意、

中野の市門より入大坂の市門に因りて市中より其
後市城へ入るに由り

將軍様ゆい登九日早山を市に於て其日の晩方伏見の市城へ

入るに由り
落桂集

一 大坂の城は七日に落城しし時秀頼公未山里に在りしに

よきせしれ次の日八日に

家康公に京都へより移りし

秀忠將軍へ誓く耳談合まりし其後

家康公出陣し時諸軍皆も聞あけ宣ひ是は秀頼を

い助け給ふ意なり

將軍の別命なりしに仰りしに

秀忠將軍作らるに左様ゆいぬるも度々の悪逆の上は助

け中候成りぬし宣ひしに

市に於て聞あけしに理成語を助言中して其兼川よ不及力に

よい分別しに任じしに

家康公京都へより移りし右の耳談合に如頼し有くよ

て大岡の秋像の束帯御より地をり、此處其後社政の儀も
悉く取こりたり、此の地をり、
此の御付より有るは、
此の
政而より、此の御付より、
此の御付より、
此の御付より、
此の御付より、此の御付より、
此の御付より、

一 大坂市陣の時、此の時、
此の時、
此の時、
此の時、此の時、
此の時、
此の時、
此の時、此の時、
此の時、
此の時、

功の入る、此の功、
此の功、
此の功、
此の功、此の功、
此の功、
此の功、
此の功、此の功、
此の功、
此の功、

將軍今後の、此の將軍、
此の將軍、
此の將軍、
此の將軍、此の將軍、
此の將軍、
此の將軍、
此の將軍、此の將軍、
此の將軍、
此の將軍、

次中めりし湯に大岡の信長の願をめぐりし信長の子孫
と成り死罪あるは流罪に似たり誓ひ湯尚家大岡の恩成
かつらもく中書大岡の遊するも強く替ふ其道は有
る友の流や湯尚家いふも大岡の恩なり其く中書
に湯に在るも今度の湯利運露るも湯に在る有りし中書
作よるも湯に在るも湯に在るも湯に在るも湯に在るも
其恩の上早く大岡へ入居しるも湯に在るも湯に在るも
湯に在るも湯に在るも湯に在るも湯に在るも湯に在るも
湯に在るも湯に在るも湯に在るも湯に在るも湯に在るも

計畧難推の旨大坂めぐりし自然左様の事湯に在る有りし
儀ゆりしも湯に在るも湯に在るも湯に在るも湯に在るも
湯返事しし今湯に在るも湯に在るも湯に在るも湯に在るも
川中事の様ゆりしも湯に在るも湯に在るも湯に在るも湯に在るも
同家の所存あるも湯に在るも湯に在るも湯に在るも湯に在るも
彼らの事ゆりしも湯に在るも湯に在るも湯に在るも湯に在るも
照覧しめん先取仕分友の彼者も湯に在るも湯に在るも湯に在るも
い拙者も湯に在るも湯に在るも湯に在るも湯に在るも湯に在るも

の備い程に勝平の是より是より子細に織田信長いし、
小早の時依く其政と前田利家とありぬり、款をいし、
倒すは是より依たる是の首と、是よりとあり、利家いし、
我はい款を倒し、是よりいし、是よりいし、是よりいし、
先なる是の首は其元と、是よりいし、是よりいし、
柴田権六も此身は左様とあり、辞退の首あり、中より我
木中清へ、いし、いし、首をあげ、名は龍授の者
あり、是よりいし、是よりいし、二人同道、いし、信長の首は、
て権六の中よりあり、款を倒し、首をいし、是よりいし、

きと、中よりいし、吟味あり、是よりいし、是よりいし、
是よりいし、中よりいし、信長は、是よりいし、是よりいし、
なり、是よりいし、是よりいし、是よりいし、是よりいし、
と、是よりいし、是よりいし、是よりいし、是よりいし、
と、是よりいし、是よりいし、是よりいし、是よりいし、

一 市販の、前大坂の儀、何れも中より、奇妙の市軍意あり、
是よりいし、是よりいし、是よりいし、是よりいし、
老幼の者、いし、いし、いし、いし、いし、いし、

系伏見の事ども毎日晴居るもくわいふ志田のまひ
突をりひ友旗る下を志ほり世せおほくも旗本をよく
知く度く付也
しむり七日の日の時ふく負るゆりよ
しき成出くはぬい傳長老湯合戦湯勝ちり破軍のめく
りよりくぬく長老摺くしきりゆりく湯ゆき
と堀丹後守度く吐く
士候
倉箱

一 大坂城中小湯高勅を湯後及又湯下くくい別小入な

権規様湯意はゆり也
武功
雜記

一 大坂城中の居人を或者擲捕

家康云く見せゆりまの川も其時
家康云落人小湯尋ゆり也城中系お陽亦く矢獲りつ小
足抱何人涙一宵小士何人誘り足抱頭を侍何祓くも皆の
敷く系巻の敷ゆく彼者ゆくと書付目録記す作付人数
積り系の高城の冒湯積りせぬ城扱又録るるやと湯
尋あせの中くく着白粉小是女板湯尋遊候言り湯尋

新加比色に頼より一中と扱餘の大中小土めく傳へせ
二色くゆるまゝかゆ記と能記かけん我傳へせ器よ入
湯見せ新加比色に其内れ大小ゆる記我さうて是種
中扱い故中小米少く一と宣ひ彼者發と判城へ追返一
給へ陣屋く一昨

家康公の松子我尋く一衣我震ぬ下よりりり後復又
を湯大野渡追等小語り以ふい

家康公候の吟味まぐ一給ふ事能く工吏治記

大將より始候味方勝利あるへう〜ま〜と中此の工吏治
を小思ふ極に此為人争り委て知や然ま〜

家康公何事も能授〜仕給〜は是とも工吏治事我
故中一知〜七筆城の士卒とと〜んとの湯工吏と覺
へ〜り〜これい為人我返一給ふなり〜と吉田長宗我
郎二人とも此事我咄〜はる〜となり大野渡追万事
我意の働故世中是ま〜と思ふゆへ〜右有人めい何と
た〜〜工吏治記

めし忘る事有りくく其く却て訓戒の多めく是く
何くくめ右の海り大智の味あめく宣ひける謀く大徳
大志末の考委記事九人の及へ記くあくはくくも

権魂様又括別の敷智故何りくを振く宣ひ前廣小條の事
本あまも半竟大坂の城を造く秀吉の謀めく是れへ
記めのもも思召振め大徳修理くく血糸めく思意を記
者との茂蘭々原流く市取立九子石の市加恩めく大坂の
長治くなりは是の優美の男めくあり秀頼母若菜殿

と名優あるなりく難説記り功片の行桐是く為小帳せくも
振く東果地新く大坂市麓城く及び

兩上様出寄有くく秀吉の言中ける通り急成めく中く
攻落其事果りく記委く金堀城くく樽塚門を堀成
す是ん旨を作出時く正片皆近國丹波の金堀と諸目代
板倉より呼寄くく是戦有るをよりく云上くくは是

権現様市此く記何くく上方の金堀城記城あり
功あるへ記甲冑の全堀くも戦必武田く時く救急城せめく

石連堀跡并御殿跡といふ一是なる事なるは石連脚跡を以て後
日教に余をくくつたの白くも是を唯よせり堀せりて終る
る漸く目を強く甲斐の金堀ありは是に則ち堀跡堀崩
すん事言は成りて常尋あり一は是より六ヶ後地形の
城郭さへ伝言の代り教後堀跡あり南城の北幣いとも
安き事々中然きとも重て城跡は堀ふりて一て却て山
城よりい堀りてくく一いつくも常尋にたなり堀底に集
て石原板石以て築成りて一は是に堀埋り堀底に通る堀
あり其堀跡を石連跡といふ金堀中は是に則ち諸陣と終り若
干の普通を集め多々の松材木を運ひよせ山のまゝ積
重く其支度終り其時分は後殿の連枝系抱若狭と忠告の
毎堂とめりよせり堀尾に終りり石原秀頼野分とふり
く終りとも

家康に於てい金堀跡を以て終り

將軍秀忠公は壯年産後なる大堀板甲斐よりなる一は金堀

堀跡を諸大堀の中付殿及用言終り一は堀中へ堀入矢倉

榎多門我崩——惣攻——壘に在るんとて結搦なり我
割れはととも

將軍史々兼引たり——孫々秀頼藤原中い孫孫女たり是を
落楯の時柴小死せん事物々多しあり能く秀頼我に
め流敵小見見我如く也新攻支度の難及辨我物語——意
死
將軍へ和睦我を治す事——計ひ治すへ——
將軍由と許容なり——秀頼の事なりとく

不肖——合衆ある處死有

家康公急度見——和睦をせしむるなりと認り
你合衆拒の母堂と城内——ををりなり柳太坂なりと大楯
合衆と此の小楯あり政務を事務なる事なりと持
楯の水底と榎入り——を城内へ楯入る候中——米事小
ていな者是とも合衆とも市内を治して——の味取め
うあうひ志うし甲別い遠山由へと秀元の疾と不承事な
是に度く信玄の時代我治——多しなり——我も合衆も

矢継ぎ足一人あて二人あてと人様不足なりそと中山結
白旗めい大勢勢ひ誰人送出来てあし死めのならぬ
さへよりうめりて事取事なればなり一大事の麓城ふ
こありちやうとやうとなくんと付入りなりちやう
あし一城中の者も強者親類又い近付はてして金銀
はうひ獲英賢何れははらうしりんと引せよあしひ
引入事又あしんとしり城中のものも誰波に申し
中あしきならしひしうちいめしひさうしひ互に公並

しりて事あり又付入の款何れなり
とらうと城中引出さうりてよりしりあしり
斗略知たの事取取取れんとしり一人出はれ我を
しりて事ありて其人数引しりて事付入し城へいよ
てはしりて事ありて事付入し城へいよ

権規様事ありしりて事ありしりて事ありしり
あしりて事ありしりて事ありしりて事ありしり
とらうと城中引出さうりてよりしりあしり

なりしと書物語なり 三つこ
揚信

一家康云云信信の弓矢く通々の次第あり軍の弓矢礼入
弓矢防戦機働万行事の弓矢利のあるい百働と行事の
弓矢く信作の

家康云云常時い今川と信長の行事く常来りて四働
板之河兵常時く属以後信言と信長の行事以後大
岡家の大名くお常行事の行事又大板常陣い
將軍極く秀頼の行事く常来りて常勝利と信作の

弓矢の常来りて常存の事 東照官清名
卷開書

一元和二年丙辰正月

大御所御不豫之間屢召土井大炊助利勝有御
遺言之事且仰曰近來軍法次第皆以鉄炮為先
弓次之鎗次之騎兵次之吾謂不為定論須下以鉄
炮弓為先騎兵次之以鎗或為左翼或為右翼聚
之於一所別置奉行人待下知而可也汝以為如
何吾百歳之後以此事可下告

將軍以議定之 紀年

權規極涉攻新田のめい何方めても一方の涉明くして涉

三卷涉攻新田のめい 三河一 揚治

一 城中より揚治極事ありさやうせふる能はる

後より一是も夜討のめいあり城へ急討ありも極

も同 三河一 揚治

一 一の極幅狭く下めし極振出れぬあり極も

のめい

新田修一は又城の方をへし向せ急よ水堀も狭うよ

一 舟の目せしありぬ後より一寄るは極砲の近く

あるもよしとなり今のは丸の極廣極るるとして涉

石身となり 永日 記

一 味方のねくはめい死人の首めしもとるうり極ありと

權規極涉意ありこれより 武切 雜記

一 權規極涉意は極の益より一端も用又大めのめいあり陣羽

織いぬのめい毛類より 古士 傳治

一 権規様と云く武道賢多しむ侍の戦場へ赴くかゝり討
死候とく一應此の事なるとい叶ふ程く一白齒の
とのい齒の黄いろとなりぬ振めたる髪も白ひと
むるより一と名無成承り傳へて止るる面い大坂あ登
の陣陣の首飾様といふくも持系は後ゆへとも香炉を
く放五月七日めし髪く香炉とめの中なる元とくい
市を留くき人も無くゆとなりおたりと云く小糸
の武士史料の具足候中付おとせし時洞小糸甚おとい

お尋く候とせしとも甲く云いさ下なるよりきそ子細い討死
と遠くある時甲の首と一而く款の子く海におたりと云い
死後の為めくいたの事くとの候くもくゆとなり
後河
去者

一 感時

家康公御軍行の時先く森あり此森伏兵疑く急てさ
り一見る程くより一此侍近習の人中よる伏兵湯
座有あり子細い森の上く踏くまると辰中此別儀ある
程く一はとなり云曰然く一應成教遣はへきより

恒以下の者。族の笠印をせり。故小野亦と云り。なり
常山
化境

